



立神峡だより

つつじやサツキが満開の立神峡

芝桜や桜の花が散るころには次の主役のつつじやサツキが見ごろの季節を迎え新緑の立神峡と彩を変えて全国からの観光客を迎え入れることとなります。特に今年は新たな戦力として、植木などの剪定が得意な人材が加入したので、公園管理の面では今まで以上に綺麗になると思います。緑色づく中に、ひと際目立つ園内の植木の花々を是非ともご覧いただきたいと思ひます。



熊本県内 96 か所のキャンプ場で人気度No. 1 を獲得

熊本県下には96のキャンプサイトや施設がありますが、強豪ひしめく中に人気度No.1は立神峡公園となりました。またアクセスランキングも2位に入っており、星の数でも最も高い5個のうち4.58個と最高ランクになり、この3年間の成果が素晴らしいものと評価されました。これもひとえに町民の皆さまからのご支援と、ホームページの更新・フェイスブック・インスタグラムといったマスメディアを活用した広告・宣伝の賜物と思ひます。人気度を保つということは中々大変ですが、この素晴らしい景観を誇る立神峡を多くの人達に知ってもらい氷川町を訪れる機会としていただき、移住・定住に繋げられるように頑張りたいと思ひます。

九州各地からコスプレイヤー大集合

4月1日はここ立神峡公園はコスプレイヤーで溢れています。九州各地から参加したコスプレイヤー約90名がそれぞれアニメやキャラクターに扮して公園内を散策しながらカメラマンの注文に応じて写真を撮ってもらったり、桜吹雪が舞う立神峡の素晴らしい景観をバックにお互いにポーズを取りスマホで撮ったりとまさにコスプレイヤーの日となりました。今後ますます開かれた公園を目指します。



震災地域の福島県と益城町から子供たちが来園

立神峡里地公園に益城町から少学校の子供たちが里地屋敷に宿泊に来ました。これは、UPPLEが企画した被災地支援の一環で九州女子大学のメンバーで構成された学生が定期的に子供たちを支援しているとのことです。里地屋敷において昔ながらの体験や五右衛門風呂を沸かしお風呂に入ったり楽しく過ごしました。また、熊本YWCAのボランティアの皆さんがログハウス・ロッジ・里地屋敷を貸し切って各種活動を展開しました。特に今回は福島の子供たちを招き、熊本の子供たちと触れ合いながら楽しく交流しました。



【お問い合わせ先】立神峡公園管理棟

☎ 62-1543 FAX62-1546 (8:30~17:30 火曜定休日)

ホームページアドレス

http://tategami-camp.com

町民文化

短歌

軍艦の写真展示の博物館
探せど兄の“香椎”は有らず
北野津 宮本 末秋

滝水の流れる子安観音に
幾多の母の願いかけ有る
西野津 古崎スエノ

赤飯を供えて願う孫兄の無事
心と身体成長あれと
鹿野 尾崎 京子

春の暮れ夕陽に照らされゆふ散歩
ポケットのの中の句帳かな
西野津 古崎 栄子

此の手術全身麻酔で行なわる
麻酔覚ねばどうなる事か
吉本 橋村 正之

院内のガラス一枚内と外
緑の風に時差を見ている
鹿野 前村 俊子

石走る立神峡の藤の花
香気あえかに咲き出でにけり
北野津 井田 道寛

東京の気候異変をテレビにて
知れば息子の家族を想ふ
吉本 高橋 澄子

少子化の憂き世の闇の薄明り
瑞穂の国の未来ぞ如何に
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

俳句

食べたこと朧となりし土筆ん坊
北野津 宮本 末秋

感動は胸にふくらみ菊根分け
西野津 古崎スエノ

桜咲く孫兄の制服袖長く
鹿野 尾崎 京子

合格のしらせ届きし櫻花
町 香山菊童子

春眠の自由に寝そべる迷い猫
西野津 古崎 栄子

花吹き緑の姿勢つ心
鹿野 前村 俊子

野津橋の瀬音ほのかに青葉闇
北野津 井田 道寛

看護師の笑顔明るき花日和
吉本 高橋 澄子

春霞、涅槃の阿蘇は一切無
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

春光のほのめく灘に未来あり
桜ヶ丘 吉田 照子

生かされて今あふ侍や藤の花
町 田中 澄子

歳月は眼差しのように、若葉風
桜ヶ丘 宮崎トシ子

投稿いただきました作品は、短歌、俳句それぞれ一句とします。必要な場合は、読みかたを付けてください。また、確認のためお電話することもありますので、連絡先の記入をお願いします。締切は毎月8日までです。ご注意ください。

三島由紀夫 をたずねて

法道寺 本田 花風

しかし川端のノーベル賞受賞(66年)を機に文壇も儀礼的になり、それから二年後、自衛隊市ヶ谷駐屯地で自決した。三島を高く評価していたドナルド・キーンと66年、遺作となった『豊饒の海』の取材のため奈良県桜井市の大神神社(八百万といわれる日本の神々の中で大物主大神を祭る)を参拝した。と、奈良盆地の東の山裾を縫って続く山辺の道を散策した。その後自衛隊に体験入隊する。この地を訪れた三島の目的を、文芸評論家の富岡浩一郎の「日本の原点でもある大和への旅は、自身が一番根源的なもの、十代の頃の純粋さへの回帰だったのでは」とみる。

解説…貫したストーリーというものはなく、祖先への強い憧れとアンノイ(倦怠感)な雰囲気がある追憶と観念的な挿話が断片的に織りなされている詩的作品である。刊行(昭和19年、戦火の最中)他に本のない時代であるから、四千字が一週間で走り切れた。刊行された『花ざかりの森』を、三島の存在を知らない芥川比呂志や吉本隆明が買って読み、文学青年たちの間に、学習院出身で早熟な天才が現れたという噂が流れた。秋山駿もこれがあの才能ある者が書いたのかと、あちらこちらの本屋を見てまわったと当時を回顧している。「潮騒の炎に向かつて立つ山口百恵と三浦友和は記憶に残っていたが、三島の作品との記憶は、ツキリしない。そんなことよりあの時キーンが、三島と決断しておれば、福の云などなかったかもしれない。」ついでに、文庫のタイトルは「花ざかりの森・憂国」、全13篇が編集されており、「憂国」は読んではいなかったが、それと察するタイトルである。226事件を背景に若い将校夫婦が死と対峙する短編の物語。三島を知りたければこの作品を見よと本人が言っている傑作であり、憂国は正に市ヶ谷の割腹を予感した作品であった。寸借論評・国文学「解釈と教材の研究」特集・三島由紀夫が遺したものの小説家の誕生から終焉まで 昭和51年12月号発行学燈社参照 三好行雄 1926・90 国文学者の今文のゆくえ「金閣寺」再説から 昭和45年、つまり三島事件の年の初頭に、わたしは三島由紀夫との対談の機会があった。対談も終わりに近いあたりで、映画出演も写真のモデルもみんな遊びだが「桶の会は違う」と主張する三島に対して、わたしはいささか執拗なまでに、「三島さん自身は、最後まで認識のなかにいて桶の会は認識が行為と触れあうとの極限のところまで認識を拡大した形ではないか」という意味の質問をくりかえしたが、そのとき、わたしは「金閣寺」の二節を想起していた。今となっては自分の阿呆らしさが嫌になるが、三島由紀夫は、桶の会が行動体の原則にたもたれた集団であるとの主張を許さなかった。『東京大学教授』事件を、ノーベル賞を逸失したことに起因と過去に記したことは違っていたのか……。(終り)